

今日の黙想のてびき

週日聖書日課 民数記 13:17~33
2026年6月17日(水)

◆文脈

- 民数記では、2年とどまったシナイ山を出発して、カナンの地に入ろうとするモアブの地までの38年の旅の歩みが記されます。荒れ野の旅路はこの民数記に記されているのです。
- この歩みにおいて、神は、民をカナンの地に導き入れる準備をします。その一つが人口調査です(第2章、第26章)。神は、12部族内の一人ひとりを数えて恵みをお与えになります。

◆あらすじと説き明かし

- 主は、パランの荒れ野にいたイスラエルの民にカナンの地を偵察するようにとお命じになりました。
- この地は主の約束どおり、肥沃で豊かな土地でした。ところが、そこに住む民、アマレク人、ヘト人、エブス人、アモリ人、カナン人は強く、町は城壁に囲まれて、攻め入るのは難しそうでした。特にアナク人は体が大きく天使と人間の混血、ネフェリム(創世記6:4)だとすら言います。
- カナンの地の約束は神の恵みであり、またご命令でもあります。にもかかわらず、カナンの住民が強いを見て、尻込みした者たちがこの後エジプトに帰ると言い出します。あいかわらず神に反抗してばかりの民の姿が描かれます。そしてこの罪が元となって、民は荒れ野を40年さまようことになります(14:35)。